

私の職業

佐々木 啓策会員

私は昭和 24 年租界のため一時工場を移していた青梅で生まれました、父はこの神田で兄と牧製本印刷株式会社という製本工場をやっておりました。品質が売りで、著者の方々からも製本は牧でしてくれと希望が多かったようです。戦争も終わり工場も神田に戻りました。私は当然のようにいずれ製本屋になるつもりでしたので小中高そして大学と学生生活をのんびりと送っておりました。受験勉強のあとの大学 4 年間は全く何も学ばなかったようなものです。

ところが突然父が「ドイツで製本を勉強して来い」と言い出したのです、それもマイスターの資格を取って来いと。それができないなら他の就職先を探せというのです。何かを勉強する様子もなく、夜になると六本木あたりでプラプラしている息子を見て、こんな者を現場に入れても役に立たず会社に迷惑なばかりで、何とかしなければと思いついたものと思われま

す。私の知識はもう 50 年ほど前のものですが、ドイツの職業制度について少し説明します。ドイツには徒弟制度の面影を強く残したマイスター制度というものがいまだに残っています。(現在はデュアルシステムと呼ばれているようです) ドイツの若者は誰もが小学校 4 年生ぐらいになると、家族の社会的レベルあるいは友達からの反応等々を考えたらうで、自分は何を一生の職業とするかを 300 以上ある職業の中から選択しなければなりません。一部の成績の良い者はギムナジウムという日本と同じ大学に通じる普通高校のコースに進むこともできますが、多くのものはハウプトシュウレという中学に進みます。そこで彼らは、週に 2~3 日をいわゆる徒弟となり現場で生産に携わりながら仕事を学び(報酬をもらえます)残りの 2 日程度を中学校に通い一般の勉強をします。3~4 年でこの職業訓練を終えた若者は公の試験を受け、合格すればゲゼレという資格を与えられます。その者たちだけが社会から一人前の技術者として受け入れられ、のちにそれらの中からとりわけ優秀なものがマイスターの資格試験に挑戦するわけです。合格すれば新しく工場を立ちあげる、あるいは現場での指導者等になれるわけです。

ドイツでの生活が始まり、ドイツ語は何とかなりました。困ったことはアルコールが飲めないこととダンスができないことでした。酒が飲めないという理解はドイツにはありません、飲み会などで飲めないと断ると、仏教では飲酒は禁じられているのか?あるいは肝臓が悪いのか?と問いただされます。生まれつき飲めないという驚き、無理に飲んで赤ら顔になると珍しがって皆で笑います。

製本機械工場、製本工場などでトルコ人に混じって何か月か働いているうちにいよいよマイスター学校の新年度が始まりました。19 歳から 50 歳くらいの者約 20 名が共に学びます。2 年間で実技はもちろん、材料学、製本の歴史、簿記から始まる会計事務、製本工場を始めようとする者が必要とする知識のすべてを与えてくれます。朝から晩まで製本づけの毎日です。図画工作は好きでしたので実技の訓練は苦にはなりませんでした。むしろ楽しい毎日でした。

2 年後マイスター試験に無事合格しました。手製本と機械による量産部門の 2 種類あるのですがともに合格することができました。

晴れて一人前の職人です。報酬をもらえる技術が身についたという自覚は自分への自信となりました。そこで初めて、自分の社会に対する立ち位置が決まったとも思いました。自分はこの製本技術をよりどころとして身を立てていくのだと強く感じました。下請けを含めるとその家族などを含め約 400 人の生活を支えていかねばなりません。

ロータリーに入会させていただき、最初に「職業奉仕」というスローガンを耳にしたときその意味がすぐに理解できました。自分の職業にまい進することこそが社会に大いに奉仕することになるのです、それこそが良い社会を実現することにつながるのです。

現在は後進にまかせて製本工場からは身を引きましたが、職業奉仕の気持ちはこれからも忘れずにいようと思っています。

